

MACF 礼拝説教要旨

2022年8月21日

【自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って…】

ルカによる福音書 9章

9:23 それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。

9:24 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。

9:25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか。」

イエスさまは、ここで、弟子たちに決意の表明と新しい生き方を求めています。

1) 私について来たい者は

イエスさまは弟子たちに無理強いをせず、「ついて来たい者」は、従ってくるようにとお話になりました。つまり、救い主イエス様が、大いなる苦難を受け、従うものも苦難を分かち合うことになるから、無理に従う道を選ぶことは大変むずかしい選択となるのです。

にもかかわらず、イエス様に従いたいと願うのは、自分の思い込みではなく、神さまが心に促しを与え、確信を与えてくださるからこそ決意できるということだと思えます。

つまり、イエス様に従うという出来事は、決して「自分の自慢」にはできないことなのです。神さまが呼び出し、神さまが促しを与えてくださったからこそ決意に至る出来事なのです。

2) 自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って

イエス様に従うということで、難しい点がここにあります。

「自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って」という歩き方は、一体どういう意味なのでしょう。

単純に言ってしまうと「自分の欲求や願望のためではなく、イエス様が託して下さる役目・十字架と思えるような使命を日々、新鮮に受け取りながら生きる」ということになると思えます。

そして、イエス様が日々託して下さる十字架とは「自分のいのちそのものも含めて、自分の持っているものを、他者に提供する、他者に分かち合うという意識」です。

自分の自信あるものを手放す意識、自分の所有だと固執しているものを手放す意識とも通じていると思えます。

5000人の給食のときに、話しましたが、自分がイエス様から託されたパンを誰かに渡すということと関連があります。

自分は栄誉よりも、貧しさや傷を受ける事が多いかもしれないけれど、イエス様から託された自分の「いのち」「時間」「もの」を自分以外の誰か、必要としている人にわたしていくことが日常になるのです。

人間は、おそらく誰でも自分を評価されたいし、自分の能力や才能、また慈善的な行為さえも結局自分の「誇り」にしたい気持ちを持っていると思えます。

しかし、それらを捨てて、手放し「誇りも自慢も持たないひとりの人間」としてイエス様の前に立ち、従っていく意識が最も重要なこととして求められています。

それは「与える喜び」に生きるという事にも通じているかもしれません。

イエスさまは「恵みを届け、祝福を届けてくださいます」それを受け取る喜びは日々与えられます。そして、使命も担うべき十字架も与えられます。

ただ、それが私達に「自分の自信や拠り所としているものを手放す」ことを求めているので、それが「与える喜び」につながれば良いですが、心の中に「こだわり」が生まれる可能性があります。

3) 全世界を手に入れても、失うものがある

そして、イエス様は、重大なチャレンジを語ります。

9:25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか。」

自分のものを追い求め、自分の宝、誇り、自慢できるなにかを追い求めていくと、結局、食べすぎのようになり、肥満状態になり、自己満足、自己完結になりすぎて、イエスさまの恵みも祝福も表されることがなく、最終的には自分のいのちを失うことになるということです。「もっともっと」という欲求が止まらなくなり、感謝や謙遜が姿を消していきます。

自分のすごさを誇示するような意識が強くなるからです。それはまさに「あなたのいのちを失う姿」と重なるからです。貪欲の塊のようになってしまうのです。

4) 自分のいのちを救うということ

極論すれば「人は神の恵みを受け取り、それによって光を受けて、手放すべきもの、与えるべきものを示されたら、いさぎよく、それらを手放しつつ生きる」ことのなかに人生の祝福があるのだということなのだと思います。

イエス様ご自身の証がそれを表明しています。パウロはフィリピの信徒への手紙の中にこう書きました。

フィリピの信徒への手紙 2 章:

2:3 何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、

2:4 めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。

2:5 互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。

2:6 キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、

2:7 かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、

2:8 へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。

2:9 このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。

2:10 こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、

2:11 すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

「イエスさまは、神の身分であるにもかかわらず、そのことに固執せず、自分を無にして、しもべの身分となられた」という生き方が、私達ひとりひとりに語られ、そういうことに促されているなら、

その道を進むようにと励まされているのです。自らを滅ぼしてしまわないようにと。

わたしは、この説教を作りながら、わたしが手放して、十字架を背負うという言葉がどういう意味があるか、考えさせられました。

わたしが大事なものとして、自分のもののように握りしめていたもので、手放すべきものはあるのか、また、他者に与えるべきものはあるのか、いろいろ考えさせられています。

豊かな人生への流れを見つけられると良いですね。

アッシジのフランシスコの「平和の祈り」を紹介しておきます。

「平和を求める祈り」

神よ、
わたしをあなたの平和の道具としてお使いください。
憎しみのあるところに愛を、
いさかいのあるところにゆるしを、
分裂のあるところに一致を、
疑惑のあるところに信仰を、
誤っているところに真理を、
絶望のあるところに希望を、
闇に光を、
悲しみのあるところに喜びをもたらすものとしてください。

慰められるよりは慰めることを、
理解されるよりは理解することを、
愛されるよりは愛することを、わたしが求めますように。

わたしたちは、与えるから受け、ゆるすからからゆるされ、自分を捨てて死に、永遠のいのちをいただくのですから。

* *

この祈りが私たちの祈りとなりますように。
祝福を心から祈ります。

* *

MACF 礼拝映像はこちらです。

<https://youtu.be/Cj4KR6cSt78>